博士学位論文審査要旨

２０１８年7月１７日

論 文 題 目： 戦時下日本ＹＭＣＡの活動と末包敏夫―大陸事業を中心に―
学位申請者： 遠藤 浩
審 査 委 員：
主 査： 神学研究科 教授 原 誠
副 査： 神学研究科 教授 小原 克博
副 査： 神学研究科 教授 関谷 直人

要 旨：

本論文は、昭和のファシズム期とそれに続く日中戦争を含む戦時下において、神戸、京都の各YMCAで主事として働き、引き続いて中国で展開された日本のYMCAの大陸事業に直接、当事者として参加した末包敏夫（すえかねとしお）という人物に焦点をあてて、その信仰の軌跡と行動を論じつつ、この時代のYMCAの諸活動とその歴史的意義と限界を論じたものである。この論文の研究上の貢献は、昭和初期の日本でYMCAを中心に展開されようとしながらも崩壊していったSCM(Student Christian Movement)の社会的実践活動が、中国大陸で行ったYMCAの諸活動に継承されたことを明らかにした点にある。いうまでもなくYMCAは国際的なネットワークを持ち、中国にもYMCAが存在していた。このYMCAの諸活動は、日本軍部との複雑な関係の中で展開された。本論文は、これらのすべてを解明するにいたってはいないが、この活動に直接主事として関わった末包を機軸に置くことによって、その歴史的意義を解明することを試みた。この主題に関する先行研究は少なく、しかも末包自身が残した資料も多くはないなかで、本論文は日本キリスト教史、またYMCA史研究に新しい洞察を与えたといえる。

本論文では、第1章で末包の入信過程と同志社大学での学びを時代の思潮や同志社史との関連で考察し、神戸、京都のYMCAがSCMを都市のYMCAとしてどのように展開しようとしたかに言及しつつ、第2章で当時のYMCAのSCMがどのような経緯で「東亜論」に傾斜していったかを説明した。続く第3章から第5章で、その時代的背景とともに日本のYMCAが国際的なYMCAの諸活動とどのように関連していたのか末包の活動を通じて説き明かした。SCMはその後解体されていくが、SCMに関わった日本YMCAの活動のひとつが末包らによって展開された大陸事業であった。第6章以下第8章では、YMCAもファシズムの進展、例えば世界学生キリスト教連盟の極東駐在幹事であったタッカーが来日中、日本の公安によって逮捕拘引され、これに末包も関わったことなどを扱った。日本のYMCAの大陸事業として広東、南京、上海に日本のYMCAが設立され中華YMCAとの関係や日本の軍部からの要請、また欧米のYMCAとの関係など、複雑な影響関係を描写した。

中国での大陸事業に直接従事した末包は、戦時下に中華YMCAのメンバーとの親密な人間関係を形成したが、日本の敗戦後、この人間関係がどのようなものとして継続され、その信仰的な資質がどのようなものであったのかが、第8章、第9章で考察されている。末包という一人の人間が、日本のYMCAの戦争責任とその総括をどのように担って戦後を生きたか、を論じた本研究は、戦時下の日本キリスト教史研究における民衆史研究としても意義あるものである。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると

認められる。

総合試験結果の要旨

２０１８年7月１７日

論 文 題 目： 戦時下日本ＹＭＣＡの活動と末包敏夫―大陸事業を中心に―
学位申請者： 遠藤　浩
審 査 委 員：
主　査： 神学研究科　教授　原　誠
副　査： 神学研究科　教授　小原　克博
副　査： 神学研究科　教授　関谷　直人

要　　旨：

2018 年 7 月 3 日、17 時から 19 時まで、神学館会議室において総合試験を実施した。

昭和のファシズム期のキリスト教に関して、先行研究を含めて的確な知識をもっていること、また日本の YMCA の歴史とその活動について的確な理解と洞察をもっていることが総合試験のなかで明らかとなった。

アメリカの YMCA の資料が収蔵されているミネソタ大学の図書館において、また数度にわたってなされた中国の現地調査において資料収集を行い、これらが論文において適切に活用されていることから英語と中国語の能力は十分な水準にあることが明らかとなった。

よって、総合試験の結果は、合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 戦時下日本YMCAの活動と末包敏夫―大陸事業を中心に―
氏　　名： 遠藤　浩

要　　旨：

戦時下とは明治期いらいの日本プロテスタント・キリスト教の体質と内容とが問われ、信仰と福音理解における国家・社会・個人間の関係論の課題が根底的に明白にされたときであった―この認識のもと本論文では、「二つの SCM」（学生キリスト教運動と社会的基督教）の参画者でもあった YMCA 主事末包敏夫の信仰の原点とその展開を探求した。かれにおけるキーワードを挙げておこう。〈苦難とともに〉、〈社会的実践〉、〈二つの SCM〉、〈神の国〉、〈東亜〉、〈他者〉、〈矛盾〉、〈消極的抵抗〉、〈歴史的実存の罪〉、〈赦し〉、そして〈希望〉―かれの信仰と福音理解はこれらのキーワードをめぐり、おもに現場体験とりわけ戦時下のそれをとおして展開していった。

本論文がとりあげる末包敏夫は、大正期末から昭和期前半の日本の YMCA において、特異な存在感を示した人物である。本論文は戦前、戦中を歩んだ末包の信仰と福音理解、そしてその具体化たる〈社会的実践〉の歩みをたどるものだ。

末包は具体的実践に秀でた人物であった。キリスト教信仰と思想とを絶えず問いつつ、つねに実践を旨とした。本論文では、信仰と福音理解はその具体化・社会的実践とあいまってこそ真の展開があるという認識のもと方法論においても文献批評に終始せず、戦時下におけるかれの信仰と思想、福音理解と社会的実践との相関関係を文献に加え実践を伝える諸資料からも読みとき、この時代の 1 ケースを明らかにすることを旨とする。

末包は 1898 年の生まれで、坂出の出身で小豆島と高松において両親の感化のもと信仰をえる。受洗は 1914 年ごろ日本基督教会高松三番丁教会でだった。1916～21 年同志社に学び、神戸と京都の YMCA で 1920～30 年代を過す。そして 1939 年から敗戦後の 1946 年まで、南京と上海の YMCA において特筆すべき働きをした。敗戦後の 46 年に引揚げ、戦後日本の辛酸をなめつつ日本 YMCA 同盟を拠点に全国の YMCA の復興にいそしむ。その過程で、広島 YMCA をつうじ被爆者と出会う。概略でこのような前半生だが、この内実を各章で追っていく。

第1章ではまず末包家のキリスト教入信の次第から、末包敏夫のキリスト教信仰の原点を探る。かれの信仰は、両親のキリスト教入信前後の姿により基礎づけられたといってよい。それは端的にいえば〈苦難とともに〉ある神との出会いである。換言すれば、人は苦難を契機に神と出会うという福音理解であった。末包は高松商業高校時代に回心を経験、日本基督教会高松三番丁教会で今村好太郎から受洗している。

末包はその後同志社大学へ進んだ。1920 年ごろの学園は、大学令による大学設置認可（それまでは専門学校令による大学）を目指し、急速に学問的充実を進めていた。末包のいた政治経済部は中島重や河上肇らが教鞭をとり、学生らの学びの意欲は高まっていた。中島らから多くを吸収し社会主義とキリスト教との関係について考え始める末包だが、同志社大学生らのキリスト教運動においては目立つ存在ではなかった。学問と信仰、また同志社の自由な校風と正統的教理を強調する日本基督教会の双方に足場をもち、社会の苦難にキリスト者はどう向き合うかという道を考究、沈潜雌伏のときを過していたようである。この学生時代に温めていた理想は卒業後就職先の銀行では苦悩となり、祈りに祈ったすえ退職にいたる。そして神戸 YMCA で信仰の〈社会的実践〉の道を求めることになる。

第2章以降はYMCAが主舞台である。第2章では末包のYMCAにおける実践の前に、当時神戸YMCA総主事であった奥村龍三を中心とし、1926年奥村が参加した世界YMCA大会とそこで決定された「イエス研究運動」が日本のYMCAにもたらしたものについて述べる。

第3章から末包が再び主役である。かれは21～31年は神戸、31～39年京都、39～41年南京、41～46年は上海と、各地のYMCAで働いた。第3章がとりあげるのは、末包の神戸時代である。神戸では商業学校をおもに担当、社会部の活動にも携わった。商業学校は低学歴の若年労働者層の第二の学びを提供しており、末包は教務の仕事をつうじ資本主義社会の矛盾を直接学生から感受した。いっぽう総主事奥村の方針で賀川豊彦らの労働運動が日常的に神戸YMCA青年会館を利用しており、社会部の一員末包も強い感化をうける。

第4章は末包の京都時代である。ここで末包は30年代初頭〈二つのSCM〉の台頭に立ち会う。学生YMCAのSCMに接近、1931年から「社会的基督教」（以下「社基」）陣営に参画、機関紙『社会的基督教』（同）創刊号～第4号で編集人をつとめた。また、日中全面戦争勃発後の38年末から全国を席捲した「東亜協同体論」に引き寄せられた『社基』紙に寄稿するなど、内外で自身も「東亜論」を展開した。社会を時局に読みかえて「東亜」の論理で調停し、そこで苦悩する若者を支える実践を模索した。

第5章では、YMCAと戦争との歴史的関係から30年代後半日本YMCA同盟の皇軍慰問などの戦時対応の過程をたどり「大陸事業」へと至る流れをつかむ。戦時下公安当局の疑念と外務省の期待などを背景に、戦時対応の空間的、時間的拡大をはかるいわば集大成として立案されたのが「大陸事業」であった。YMCAの「大陸事業」実施決定にいたる組織的プロセスを、当局の動向による影響を絡めてみることが、ここでの主要課題となる。

第6章、第7章では「大陸事業」遂行者の末包を追う。中国開港諸都市に駐在員をおき、戦時下のさまざまな国際的困難に直面しようとした「大陸事業」は、YMCA自体と同様地域ごとに多様な形態をもったが、なかでも末包の存在感は際立っていた。かれの個性とキリスト教信仰の社会的実践が「大陸事業」の一大側面をなしたといってよい。「社基」本流が時局に呑み込まれたと対照的に、その傍流たる末包版「大陸事業」は正しく社会的、すなわち〈他者〉と向き合い矛盾を肚のなかに引き受ける内実を保ちつづけた。そこに〈消極的抵抗〉者としての姿すら垣間みえることを、ここでは証示する。

第8章では、ここまで述べなかった戦時下YMCAの諸相を追う。まず日本YMCA同盟の公式声明などから、日本のYMCAが組織総体として時局に呑まれていったさまをたどる。つぎにおもに京都を舞台として、戦時へ向かう時期の京都大学YMCAと京都YMCAという各個YMCAを中心として日本のYMCAにおける戦時の諸相をみてゆく。最後に、中国大陸における各国YMCAのありさまを相互の関係性をふくめ概観する。

第9章では末包における敗戦、引揚げ、戦後日本YMCA同盟における全国YMCA復興の取組み、そのなかでえられた広島YMCAをつうじた被爆者との出会いなどを契機とし、末包があらためて自身の「戦争」を振り返り、向き合った経緯を追う。敗戦後、末包の原点であり〈二つのSCM〉的でもある〈苦難とともに〉という福音理解と実践にたいする最大のチャレンジがもたらされた。これは同時に、鋭い罪認識と赦しの恩寵を強調する日本基督教会の正統的教理が、実存レベルへ受肉する契機を与えられたことでもあった。その契機とは、中華YMCA主事から国家的な不信を末包個人へも向ける言葉が投げつけられた経験と、引揚げ後に極東国際軍事法廷での国家の罪追及の報道であった。末包がここで至った罪認識とは、個人の不信心という意味の罪でなく社会や国家の罪を自己の実存へと引き寄せた罪であり、自己と他者との関係性において引き受けようとする罪であった。

この罪を1946年時点で末包は告白している。苦痛をともなう告白であったが、かれにそれをなさしめたのは、敗戦直後の混乱のさい中華YMCAの人びとが示した戦時下の末包の奉仕への感謝と配慮であった。そこに信仰における友情をみた末包の罪責告白には「中国の友へ」という

具体的宛先があり、それが最大の特徴だったのである。

さらに大きな転回は、広島で与えられた。焼け跡でともにした被爆者らの懺悔の祈りは、中国の友が示した配慮を友情のみならず〈赦し〉の類比として再発見させた。被爆の苦難に直面した人びとの〈赦し〉を乞う祈りが、赦される〈希望〉へとかれを焦点化する導師となった。

結論。社会的実践が「神の国」へ地続きであるかのような〈二つの SCM〉的な楽観はここで否定されたが、しかしなおそこに働いて赦す神を発見した〈希望〉は〈二つの SCM〉的実践へとふたたびかれを赴かせていく。だがそれは同じ実践のようであってまったく同じものではない。戦前の「社基」対正統的福音主義の対立を具体的経験において超克し弁証法的に揚棄していく、戦後日本プロテスタント・キリスト教のあるべき姿がここにある。しかもそれが中国の友という〈他者〉を契機になされたことに、最大の意義があろう。この末包理解は戦時下に善意でなされ大きな問題を残した「大陸事業」などの諸事業を、戦後 NGO 国際協力事業や社会福祉事業など、なかんずく日本の YMCA の新しい社会実践へと否定媒介的に橋渡しする象徴的鎖の輪のひとつとして、かれを位置づけなおさせる。これが、本論文の結論である。

以上本論文は、末包敏夫という人物を座標とし、戦時下において否応なく問われた日本プロテスタント・キリスト教の本質的課題をあらためて問い直す試みである。ただ本論文は戦争を末包の真理契機として扱ったので、戦後の記述は戦争と関連する部分だけとなった。ゆえに、YMCA のみならずキリスト教社会福祉や医療、教育事業など幅広い分野で活躍した、末包の戦後のありようの大半は未検証である。その意味で本論が到達した結論は、プロテスタント・キリスト教のとりわけ戦後社会事業史的側面をみるにあたっての、問いともなっている。社会的・歴史的実存の罪とそこに示された赦しと希望は戦後のプロテスタント・キリスト教、なかんずく戦後のキリスト教社会事業、とりわけても日本 YMCA の歩みの根底となりえたのか否か—それを問うことを、筆者の今後の課題としたい。